きほく人奮闘記

父野川こんにゃく研究会

「そば殻の灰汁」を使用し、豊かな風味とプリプリとした食感が特徴の父野川こんにゃく。「歳を重ねてもいつまでも生き生きと活動できる場所」を目標に「父野川こんにゃく研究会」は立ち上げられました。５年目を迎える現在、チームワーク抜群の14人で活動しています。

会員たちが子どもの頃は、当たり前のように各家庭で作られていたこんにゃく。会員たちは「こんにゃくなんて簡単に作れるものと思っていた」と話します。

しかし、いざ挑戦してみると生易しいものではありませんでした。いつもと同じ分量の材料を混ぜ合わせても、こんにゃく芋の乾燥状態によってこんにゃくの固まり具合が異なるため、その見極めが難しいのだといいます。会長の藤田静子さんは「凝固剤にそば殻の灰汁ではなく、ナトリウムを使えばこれほど悩むことはない。しかし、どれだけ頭を悩ませても、自然由来の食品にこだわったこんにゃくを作り続けたい」と話し、会員らもその言葉に大きくうなずいていました。

芋の収穫時季に合わせ、秋から冬にかけてこんにゃくを作っている当会。気温や天候に関係なく、集合時間は早朝６時で、４時30分頃から芋を茹でている人もいます。会員の中には「芋を茹でる釜の煙」を「狼煙」と捉えている人もおり、「狼煙が上がっているのを見ると気合が入る」と、目を輝かせていました。

当会がある父野川宮成地区は昔からチームワークが良いそうで、こんにゃく作りの役割分担も、それぞれの得意分野を活かし自然と決まったそう。会員らは「息の合ったこのチームワークはどこにも負けん」と、笑みを浮かべていました。

平均年齢80歳とは思えないほど、パワフルな会員の皆さん。その秘訣は、「皆でわいわいと楽しみながら作ること」。会員たちは「芋を茹でるお釜が壊れるまで、皆で元気にこんにゃくを作りたいね」と顔を見合わせながら、話に花を咲かせていました。

鬼王丸のほのぼの日記

作　桝形 浩人
絵　にのみや なつみ

人口と世帯数

2/28現在

人　口	10,585人
男　性	4,949人
女　性	5,636人
世帯数	5,095世帯

※外国人住民を含みます。

編集後記

▼訪れた人をその物語の世界観に引き込んだ「きほくの里の人形劇」。今年披露された演目では、音楽に合わせて手遊びをする場面が何度もあり、子どものみならず大人も楽しそうに行っていた姿が印象的でした。

▼年度も終わりに近づいてきました。出会い、別れ、旅立ちなど、生活に変化が訪れる時季です。皆さんにとって今年度はどんな年でしたか？私にとってこの１年間は、たくさんの出会いに恵まれた１年でした。また、ずっと憧れていたことにも挑戦できた年でもあり、とても充実した１年間だったと感じています。これからも「一期一会」と「チャレンジ精神」を大切にし、新年度をスタートさせたいと思います。（悠）